

教科課程編成における総合的学習の歴史的考察 — 1920年代ロシアのコンプレックス(合科教授)システム検討から —

A historical study of integrated studies in curriculum planning
— Learning the lessons of the Russia's complex (synthetic teaching) system in
the 1920s. —

桑原 清*

Kiyoshi Kuwabara

キーワード：総合的学習、コンプレックス・システム、ロシア、1920年代

Key words : Integrated studies, Complex system, Russia, 1920s

要旨

現代日本の教育において「総合的な学習」が注目されてから久しいが、教科と「総合的な学習」の関係はそれほど明確にはなっていない。本稿は、1920年代のロシアのコンプレックス・システム（合科教授）を基礎とした教科課程編成の歴史を検討する中でこの関係を考察することを課題とする。1917年に成立したソビエトロシアは、旧教育の学習の特徴と言われる「教え込み」「暗記主義」「学習における子どもの自主性の軽視」を否定することから教科課程編成作業を開始した。ロシア版新教育の試行である。労働・生活環境の中で知識・能力・スキルを習得することを志向し、その方法として教育人民委員部（文部省）はコンプレックス・システムを採用した。それは、国家の経済・産業部局、地域の住民や教師たちから「学力の低下」を引き起こすと問題とされた。小学校低学年からの教科学習による基礎的学力・スキルの形成と総合的な学習との有機的な関係性が問題であったのである。本稿はその問題にかんする教育史的検討を行うものである。

* 札幌保健医療大学保健医療学部栄養学科非常勤講師 Part-time Lecturer, Department of Nutrition, School of Health Sciences, Sapporo University of Health Sciences

はじめに

現在、わが国では「主体的・対話的で深い学び」という言葉が学習のキーワードとなっている。子どもたちが学習内容を人生や社会のあり方と結びつけて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身につけることを意図したものである。このことは、教科課程の編成にあたって子ども自身が営み、認識している生活をいかに理解しているか、また学校で学んでいることがそのことを基礎として、子どもの資質および能力形成にどのような有機的に機能しているかということの意味するものであると考える。高度な科学技術に対応しながら、自らの生きる方向および生涯にわたって社会（国内および外国）と関係を持つ、そのために必要な基礎的な力を学校教育においてしっかりと身につけるということが現代社会の課題となっている。

身のまわりの社会やグローバルに展開する社会を読み解き、積極的に関与していくためには、子どもにとって教科教育と総合的な学習、双方の充実が不可欠と考える。

本稿の課題は、教科教育と総合的学習の関係がどのようなものであったかについて、1920年代のいわゆる「新教育」の発生と実践を歴史的に検討することによって明らかにすることである。そのことが現代学校の直面している実践的課題をより鮮明に浮かび上がらせることに繋がると考えるからである。直接の対象は1920年代のロシアのコンプレックス・システム（合科教授）の政策と実践である。本稿では、コンプレックス・システムを「一つの教科ではなく、複数の教科による学習者の興味・関心を軸とした学習」と定義する。

1. 「統一労働学校令」「統一労働学校基本原則」（1918年）における教科課程・教授方法理念

ロシア政府は、1918年10月16日付で学校

のあり方を方向づける二つの法令文書を公布した。「ロシア社会主義連邦共和国統一労働学校令」、「統一労働学校基本原則」である。前者は、①学校生活の基本が生産的労働であること、②学校における労働が計画的、社会的に組織されるならば労働は強力な教育手段となること、③労働学校における教授・学習が普通教育的、総合技術教育的な性格を持つこと¹⁾、等を定めた。

後者の「基本原則」は、前者の内容をより詳しく説明したものである。そこでは、①子どもは、活動するなかでさまざまな知識を容易に習得し、遊びと労働が密接に関連していること、②様々な形態の農業および工業労働について子どもに知らせること²⁾、が望ましいという立場をとっていた。さらに教育の方法に関しては、「ここでのほぼ全ての授業が、まだ細分化されていない一つのテーマについて、すなわち子どもの周りの自然や社会環境について労働を通して知ることとまとめられる。遊ぶ、歩く、おしゃべりすることは、子どもたちの活動の中で集団的・個人的な思考の材料となる。子ども自身とその周囲の環境から始まり、すべてが質疑応答、物語、作文、表現、模倣のテーマとなる。教師は子どもの探究心や行動への渴望を強制の影もなく体系化し、最も豊かな成果が得られるように指導する。すべてが、子どもの百科事典のような教授の主要なテーマである。」³⁾と続けている。

まさにここでは、個々の教科に別れて学ぶのではなく、子どもの身のまわりから始まり、自然および社会について労働を軸として学習していくコンプレックス・メソッドを構想していたことが見て取れるのである。

しかしながら実現可能性においては、それらを遂行するための物的な条件の欠如、教員の質的・量的な不十分性、ロシア政府による具体的な教育方法・教材等の各地方への提示・配布の欠如等の理由により、前述の法令が提起していたことの前途は厳しいと予想さ

れていた。十月革命後の早い時期にコンプレックス(総合、複合・統合)を意識していたが、教科課程(учебная программа)編成原理としての公的登場は、国家学術会議(Государственный Ученый Совет: 略称グース)の下に1921年に「教育科学部」(научно-педагогическая секция)が設置され、これが教育課程構想を発表する1922年を待たなければならなかった。

II. グース・プログラムの作成・公表

1. グース・プログラムに対する先行研究の評価

グース・プログラム(国家学術会議が作成した教科課程を指す)に対する近年の評価は、ロシア圏では基本的に3つに分かれている。第1の立場は、ベラルーシ・ヴィツェブスク国立大学のアルローフである。彼女は、「世代の継続性、生活力がある住民の育成を保障するために、生徒の労働教育の伝統の復活にかんする問題(人間の生活は労働活動への参加なしには考えられない)がある。」⁴⁾と述べ、続いてグース・プログラムに引き継がれているものが「労働」原理であることを強調し、肯定的な評価を行った。

その対極にあるのが第2の立場である。クセーニヤ・サラヴィヨーフは、ウェブサイト「教員会議」(педсовет)上で、グース・プログラムに対して以下の批判を行っている。すなわち、①グース・プログラムには学校に重大な損害をもたす不作為、根本的に誤った立論の存在が見られた。②アカデミックな科目の詳細を考慮せず、体系的で不可欠な知識の代わりに種々の科学の異なる要素のセットが与えられた。これは、本質的に確実な知識とスキルを獲得することに対する過小評価であった。③急速に発展する国民経済に必要な時期に読み書き能力が高く、多面的に発達した熟練の人材が必要であるのにそれができていない。④経験が浅くスキルの低い教師が多

いため確実な知識を与えなかった、というものである。⁵⁾こうした見解は、ソビエト期を含め、体制変換後には少なからず指摘されていたことである。

また、ヴァートカ国立大学のベ・ヴェ・パメローフは、ソビエト期の主要な教育史家たち(エフ・エフ・カラリョーフ、ゼ・イ・ラーフキン等の共著、1961年刊、ほか)のグース・プログラム、コンプレックス・システム評価について「社会主義体制が崩壊するまで、国内の主要な教育史家たちは、グース・プログラムの欠陥を認めることに緩慢で、極めて軽度の批判にとどめ、肯定的な側面を強調していた。」⁶⁾と厳しい批判を行っている。

第3の立場は、前述のカラリョーフやラーフキンのものである。彼らはグース・プログラムやそれへのコンプレックス・システムの適用に対して批判的であった。「教科課程のコンプレックス的構成の理念は、コンプレックス的テーマと個々の教科目を不自然で人為的に結合させるというところに行き着いた。グース・プログラムは非常に矛盾のあるものであった。一面では、それらは学校を国の社会・政治生活に近づけ、生徒たちに自然と社会の諸現象の唯物論的理解を形成するための素材を提供し、子どもたちの社会・政治的視野と国の社会主義的改造への彼らの積極的参加を広げた。だが他面では、教科課程のコンプレックス的構成は生徒たちに体系的で深い科学的知識を教える可能性を保障しなかった。そのことはすぐに指摘されることとなった。—〈中略・本稿筆者〉—すべての単一的な型の学校にとって統一的で義務的な教育課程(учебный план)の導入は、ソビエトの普通教育学校建設にとって肯定的な契機であった。[この結果=本稿筆者]1927年教育課程は、生徒たちの多面的で自然科学的で、社会・政治的な教育、彼らの労働教育、体育および美育を意味する教科を含むものになった。」⁷⁾

上記のカラリョーフのコンプレックス・シ

システムに対する評価は、生徒たちの自然および社会諸現象の唯物論的理解には有効であったが、体系的で深い科学的知識の習得には役立っていなかったというものである。この立場は、学校の果たす役割（自然および社会諸現象の唯物論的理解）にとってコンプレックス・システムは有効であったが、国家建設にとって必須であった体系的で深い科学的知識を生徒たちに与えるという課題には応えていなかったという主張である。

ここでは、ソビエト期、体制転換後のロシアの研究者の多くが、グース・プログラムにおけるコンプレックス・システムの適用によって、基礎的知識・スキルの低下が生じたという評価を下していることを指摘しておくこととする。

2. グース・プログラムの作成過程と理念

1) 1920年と1921年の教科課程

グース・プログラム以前にロシア政府の教育・学術・文化を担当する教育人民委員部（Народный комиссариат просвещения・ナルコムプロス）は2つの教科課程を公布した。この課程に対して、『プラウダ』は（つまり党側の意向を受けた編集部は）、「教育学的未来派とソビエト学校の課題」（1921年1月4日）と題した記事を掲載し、当該の「自然科学の教科課程」について批判を行った。その中で、教科課程は社会主義建設の緊急課題に対応させるべきで、人為的「労働コンプレックス法」を止めること等を要求した。⁸⁾

1921年の教科課程については、前述の「1921年に発表された7年制学校のプログラムは、上記の他のすべての要件を満たしていなかった。」⁹⁾とカラリョーフたちは、厳しく指摘している。しかし、肯定的な点として、①1920年の教科課程と異なり模範ではなく義務的となったこと、②とりわけ算数の知識を生活に必要なものにするという志向があったことであるが、否定的なこととして③数学の問題集は完全に不適合でありすべて破棄す

べきで、それらは当該学校単位で作成されるべきこと、④生徒の年齢特性を十分に考慮しておらず大量の教材を詰め込みすぎている、ことなどを指摘していた。算数については、「生徒たちは測定とそれらの実際の意味を理解すること、たとえば、人の身長が3メートル、役馬の体重が100キログラム、居室の面積が300平方メートルということはありえるか等である。その他に、長さ、高さ、重量、容量などを目測で推定することを伸長させる必要がある」と〔教科課程の一本稿筆者〕作成者たちは指摘している。」と引用しており、1～4学年の教科課程は、口頭計算の適切な設定、迅速な口頭および筆算のためのスキルの発達を要求していた。教科課程は、最初の2年間の各授業で、口頭計算に10～15分振り分けることを推奨していた。¹⁰⁾

以上の1921年段階の公的教育課程をめぐる議論から、ここでは、子どもの知識、技能、スキルの獲得の際に教科目ではなく、子どもが置かれている環境を土台としてコンプレックス的教育（教授・学習）を実施していくという方向はこの年の教科課程においても貫かれていることを確認する。

2) 『新しい学校への途上にて』での議論

戦時共産主義（1918年～1921年）の停滞していた経済状況を克服するために、レーニンを初めとする政府の指導者たちは、1921年3月以降の新経済政策（ネップ〔市場経済への移行、農民の余剰生産物の販売の許可、小企業の私的経営の許可、商業の私的営業の許可等〕）に舵を切っていた。その過程でソビエト政府は、ナルコムプロスに対し、いくつかの重要な批判を行った。レーニンは、「ナルコムプロスの根本的な欠陥は、事務能力と有効性の不足、実務的経験の不十分な見積りと検査であり、指示を執行する際のこの経験の系統性がないこと、一般的な推論と抽象的なスローガンが優勢であること」¹¹⁾と指摘した。さらに、それらの克服のためには、

能力のある専門家を招集することを重要な課題としたのである。そのために、グースの教育科学部に多くの専門家たちが加わったのである。こうして、ブローンスキーやシャーツキー、ガルドーンたちが教育科学部での教科課程編成を行うようになったのである。

国家学術会議の下の教育科学部は、コンプレックス的教授による基礎的知識・スキルの習得および教科制の下でのそれらの習得のあり方を整理する新しい教科課程を作成するための考え方を提起し、『新しい学校への途上にて』誌上で大衆的に議論に参加することを呼びかけた。同誌編集長、クループスカヤは、コンプレックス・メソッドの導入を提起する、同会議メンバー、ガルドーンの論文を巻頭に置き、これを含め4つの論文を掲載し、労働学校、教授法のあり方、学校改革について広範な議論を期待した。4論文とは①ガルドーン、「新しい学校—原理・構造・教授法」、②エス・テ・シャーツキー、「子どものための学校あるいは学校のための子ども」、③エヌ・カ・クループスカヤ、「初等科学学校の課題（8才から12才までの子どものための4年間）」、④ペ・ペ・ブローンスキー、「小学校の教育学的課題」である。

(1)ガルドーンは、労働の概念が仕事を行う際に肉体労働と精神労働の両面を含むものであり、労働に自主的な原則が貫かれている限り、学校に適用される意義があると述べている。それ故、「活動または自主的な活動の原則は新しい学校の基本原則であり、それ故、行為の学校と呼ぶべきなのである。」¹²⁾とした。これは労働ないし作業によって身体的スキルのみならず感情的な諸能力の形成が図られるということを意味するものであった。

また初等科学学校では子どもは科学による知覚ができないので、その知覚は不必要である。子どもは、製粉機の車輪が回転する理由を理解することができ、理解する必要がある。堰の水の動きや空気中の製粉機の翼の動

きを支配する法則、この動きがどのように製粉機全体に伝達されるのか、なぜ小麦粉が石臼の下から暖かく滴り出てくるのか、等を理解しなければならない。しかし、物理学や力学の体系は、彼には利用可能ではなく、不必要であり、それが初歩的なものであっても、教科の教授はこの体系への移行を志向していく。教科の教授はそれが初歩的であっても物理学や力学の体系に重点を移しがちになる。「科学の基礎を学習するのではなく、子どもたちが理解できるような形式で様々な科学によって説明される様々な現象の複合体と考えられる具体的な生活教材であるように設計された教育に置き換える必要」¹³⁾があり、「コンプレックス・メソッドの要点はここにあるのである」¹⁴⁾と述べている。この指摘は系統的な知識の体系である教科の学習を前提とすると、学習が知識の積み上げ的なものになり、子どもにとって次第に近づき難いものになり、諸現象の本質の深い理解には到達しないことを懸念したものと考えられる。

(2)シャーツキーは学校について、①子どもの個人的経験、②学校での経験、③人生での経験、という一連の時間軸を踏まえたものとして組織される必要があり、「重要なことは知識の総和ではなく、緊急性があり、生活の中から発出すること、その必要性を〔子どもが一本稿筆者〕はっきりと感じていること」¹⁵⁾ および知識を得る方法を他の人が得たものと関連させる方法の確立が重要であると述べている。ここでシャーツキーは、ここでは子ども自身の生活の必要から出てくる経験を積むことによって人間は発達するものであり、学校や社会は子どもの経験を発達的に配備することの重要性を述べたと考えられる。

(3)クループスカヤは、学校は労働学校であり、「学校の教科課程学習の中軸としての労働は、学校共同体の生活に構成要素としての労働であり、学習方法としての労働である。」

¹⁶⁾と述べている。ここでは、読み書き、計算を含め、諸科学の基礎を学習することの必要性について強調しているが、労働的方法のなかでどのように行っていくか、基礎的学習と労働的方法の関連については述べていない。

(4)ブローンスキーは教科にあてる時間については1921年の教科課程への教育内容・事項の「盛り込み過ぎ」を考慮すると、すべてを知的教育にあてるのではなく、最低限の要件だけを設定する必要があるが、残りの多くの時間を(約 $\frac{3}{5}$)を健康と社会的・手工的労働にあてなければならない。一般的にそれが学校教育の全体のプロセスで子どもの健康、労働と知力を非常に厳格に分離することは尋常なことではないし、最良の教師は、そのような断片化を回避するものであることを認識しなければならない。しかし、他方で、これら3つの作業を無定型な暇つぶしに統合するのは超教条的な直情主義であり、「読み書きや数字の計算の仕方を教えるために、学校の仕事の特定の時間帯に一連の特別な時間を必要とすること」¹⁷⁾は明らかである。だから、たとえば彼の著書「労働学校」(1919年初頭刊)では、学校に来た子どもは直接文字に触れるべきだと主張したと述べている。

ブローンスキーは、前述のガルドーンとは異なり、教科独自の必要性・重要性について触れている。文字がスキルとして一定程度身につけていなければ、初歩的な教育さえも覚束無いことは理解するに難くない。しかし、問題は文字の学習、読み書き、計算のスキル習得にあてられる時間がどのくらいあるか、ということよりも、どのような授業が行われるかということにあるのではないだろうか。ともあれ、ここでのブローンスキーの主張の論点は、読み書き、計算のスキル習得を「コンプレックス・メソッド」と関連させて行うか否かということである。

ブローンスキーは、読み書き、計算のスキ

ルを「コンプレックス・メソッド」と関連させて行うことを前提としているが、教科独自の必要性・重要性について言及している点で他の三者とは、異なっている。

4つの論文は、それぞれの視点から学校論、教育論、教科課程論、教育方法論について述べている。①旧教育の批判としての子どもの自主性の尊重、②環境・生活を基盤とした教授・学習、③教育活動における労働の重視、については、概ね共通しているが、④コンプレックス・システム、⑤教科の独立性、の問題については認識の相違や重点の置き方に相違点があるということを確認できるであろう。

3) グース・プログラムの作成と公表

『新しい学校への途上にて』1922年第3号(11月)で、「グース・プログラム概要」が発表されている。初等科学校についての報告はブローンスキーであり、中等科学校についてはクループスカヤが報告している。

初等科学校の教科課程は、①学びの範囲について、(1)子ども(子どもの生活と子どもを直接取りまく環境)、(2)村(都市学校では区)、(3)郷と郡(都市学校では市)、(4)世界、という同心円的な広がりで構成され、②扱う教材としては、(1)人間の自己保存、(2)自然、(3)労働、(4)社会に分類されていた。その他に、言語、数学、芸術のスキル習得のための時間があつた。

ブローンスキーは、「この教材のすべてに取り組む際に、比較的まれであっても、特別に別個にあてられた時間のなかで、子どもは言語、数学、芸術の然るべきスキルを身につけさせなければならない。」¹⁸⁾と述べている。言語スキルにかんしては、①話し言葉のスキル、読み書き能力、②日常生活の中での、話し言葉・言葉の発達と簡単な記事の読解能力、③家庭生活の中での話し言葉・書き言葉の発達と本を読んでまとめる能力、④独力で本を読む能力、話し言葉・書き

言葉による要約レポート等を内容としてあげ、年長の2学年では基礎的な正字法の知識を学習するとしている。また、数学的スキルに関しては、①年少の2学年では初歩的な測定と数の練習を行う。②学習している現象に関連して、「測定して『どのくらい』と尋ねるといふ非常に大切な習慣を身につけるだけ」¹⁹⁾であり、③1000までの整数に関する口頭と筆記による四則計算、④さまざまな種類の測定(面積、体積、時間、粒体、温度など)、⑤分数、メートル法、初歩の会計を学習すべきものとしていた。

上の記述から、基礎的なスキルの習得の際に、「比較的まれであっても」(原文の表現)という表現はそもそも配分されている時間が少ないことを意味し、学習している現象に関連して「どのくらい」と尋ねる(数学)という表現はコンプレックス的テーマ学習によってスキルの習得を行っているということになる。したがって、ブローンスキーにおいても、基本はコンプレックス・システムをベースに基礎的スキルの習得を構想していたということが窺い知れる。

III. 地方からの評価とそれらに対する改善案

1. 学校現場でのゲース・プログラムの実際の取り扱われ方

翌年の1923年になるとゲース教育科学部のなかに「初等科学学校教科課程小委員会」が設置され、小委員長にはブローンスキーが就任した。1月4日のゲース教育科学部・学校小委員会の会議は、「初等科学学校のスキーム(教科課程)を作成することをブローンスキーに委ねる」²⁰⁾ことを決定した。ブローンスキーのイニシアチブで初等科学学校教科課程が作成され、1923年7月16日、教育人民委員部参与会は『統一労働学校新教科課程』を裁可した。

発表されたゲース・プログラムは「自然と人間」「労働」「社会」の3つの柱から成り立っていた。表1からわかるように、教科単位の学習ではなく、子どもが生活していく上で身近に経験していくことを題材にして自然、社会そして労働を理解していくような構成になっている。

表1：初等科学学校教科課程のスキーム

学年	自然と人間	労働	社会
1年	四季。	村や都市の家庭を直接とりまく労働生活。	家庭と学校。
2年	空気、水、土。人間の周りの栽培植物と家畜およびそれらの世話。	子どもが住んでいる村または都市居住区の労働生活。	村や都市の公共施設。
3年	物理、化学による初歩的観察(知識)。地域の自然。人体の生理。	地域の経済。	県(州)の公共施設。わが国の過去の状況。
4年	ロシアと他国の地理。人体の生理。	ロシア共和国および他国の国家経済。	ロシアと他国の国家制度。過去の人間の状況。

表1 出典：«Народное просвещение», Москва, 1923, № 4—5, с. 77. (ロシア共和国教育人民委員部機関誌『民衆啓蒙』1923年4-5合冊号77頁)。この教科課程スキームは1923年3月、第2回全ロシア県社会教育部長大会で承認された。

グースは、一貫して教科を独立させて教授活動を行うことを拒絶し、「統一労働学校基本原則」(1918年)で謳われたように教育が教科によって行われるのではなく、一つのテーマについて、子どもの周りの自然や社会環境について労働を通して知るということを授業方法としてとっていた。その方法が、一つの教科ではなく複合的教科として行う「コンプレックス・システム(メソッド)であった。」そして、ブローンスキーの未発表原稿を編集した『教育学』誌(1995年2号)掲載の「ナルコムプロス。グース」は、「ガルドーンがコンプレックス・メソッドの提唱者であることを知っている人は少ないであろう。もちろん、教科別ではなくテーマ別の『全体的教授〔後にholistic educationとして定義された理念・方法と共通するものが多いと考えられる—本稿筆者〕』がよく知られており、多くの人に支持されていた。しかし、まさにグースでこの方法を学校に導入することを提案したのはガルドーンであったのである。」とガルドーンのグースで果たした役割について指摘している。²¹⁾

このグース・プログラムはカラリョーフ、ラーフキンらによっても、学校活動への新しい革命的な内容の取り込み、教授と生活との結びつきの確立、生徒の創造的な活動と自主性を高めるための広範な自由を切り開いたもの²²⁾と評価されている。

しかしながら、グース・プログラムは学校現場において、個別の教科目別の教育との間で矛盾を抱えていたのである。1925年1月12-17日にモスクワで開催された第1回全連邦教員大会の代議員たちのグース・プログラムに対する疑問や批判について、『新しい学校への途上にて』誌は以下のように伝えている。

①教員新聞の記事では、1学期は学校がコンプレックス・システムによってグース・プログラムに沿って機能したかのように見えるが2学期の後半になると状況

は急変する。科目別方式でせき立てられるのである。どうしてかということ、形式的スキルが恐ろしいほど身につけていないからである。

②当該地域の国民教育部からの報告では、都市部の学校ではコンプレックス教授に関しては他の地域と同様に科目別方式への傾斜から自由でない。

③大人の影響を受けた子どもたちは自分たちにもっと算数や書き方、読みもの等に取り組みさせるように要求している。彼らはこれらの科目を喜んでやるのだが、グース方式で何かのテーマを彼らに調べさせる時にはブツブツ不平を言う。単調な教材で生徒を飽き飽きさせているのである。²³⁾このように、当該地域の学校・教師や生徒たちから不平・不満が多くグースには届いていた。

2. 第1回全連邦教員大会におけるグース・プログラムに対する批判と対応

第1回全連邦教員大会の主要な課題の一つがグース・プログラムをめぐる問題であった。そこでは大会代議員たちを通してグース・プログラムに対する当該地域の状況の混乱が伝えられた。地域の教員や職員たちは教育課程をどのように作成したらいいか具体的な指示を求めている。つまり、週ごとのテーマ別の教材の選択の例を必要としており、授業やその配分の計画表を作成するうえでの文献を提示することを求めている。質問・要望は以下の通りである。①グース・プログラムはどのように実施されているのか、教師の養成の実施条件、学習・教授法上の補助用具があるのかどうか、生徒たちの負担、取り組みの成果はどうなっているのか。②7年生学校の5学年で1人の教員でコンプレックス的教授を行うことは可能か。③中等科学校では、たとえば、数学等の個々の科目をコンプレックスから分離してもよいのか。²⁴⁾

これを補足する形で、グース・プログラム

をどのように理解し、実施していくかについて質問や疑問に答える資料が教育科学部の勤務員たちによって編集された。大会での代議員たちの質問を次のように整理をしている。質問ごとの割合を示し、分類を行っている。

- ①どのようにコンプレックス教授の際に、活動を組織すべきか：コンプレックスの作成についての具体的なプランや関連する文献をどこで見つけるべきか（全体の28%）。
- ②教科書やマニュアルなどが無い中で、1人の指導者につき2～3学年、さらには4学年で100人以上の子どもたちがいて、教科用参考図書や指導書等がない場合、コンプレックス教授をいかに組織すべきか（同21%）。
- ③特に郷土史に関わる教員の仕事をどのように組織すべきか。（同17%）。
- ④コンプレックス教授とスキル（スキルを獲得するための特別時間は認められているのか）の関連についての質問（スキル習得のための特別な時間は認められているか。母国語・数学に関するスキルとコンプレックス教授をどう結びつけるか）（同32%）。
- ⑤コンプレックス・システムの本質の一般的な問題を明らかにすることを目的とした質問は、それよりもはるかに少ない割合である。（同2%）²⁵⁾

子どもたちの形式的スキル習得の遅れは、代議員たちが証言しているように、多かれ少なかれ一般的な現象であると状況を押しさえ、その原因について、スキルの低下は生徒の全体的な発達を犠牲にして進行する。一方ではコンプレックス的テーマに取り組んでいる時には子どもたちの急速な成長がみられるということから、考えなければならないのは教師の教え方、力量の問題であるとして解決策を思案した。「労働ソビエト学校の形式的スキルは手段であって目的ではない。したがっ

て、コンプレックス的テーマを通して行うものと比較して、それらを優先させるべきではありません（グース・プログラムの14ページを参照）。スキルの範囲は、1924年に出版された同シラバス（112-114ページ（言語）と120-121ページ（数学）」²⁶⁾の中で述べられているとし、教師がコンプレックス的テーマに取り組む十分なスキルを身につけていないという著者たちの認識を持ちながら、コンプレックス・メソッドを用いた提案を教員たちにいくつか行っている。

算数について、グース・プログラムの第1学年の取り扱いについて例示提案は以下の通りである。テーマ「夏休みの子どもの生活」：家族の人数を数えること；誰が家族のなかで大きいのか、誰が小さいのか、という問題を解くこと。棒や小石による数の計算。スケッチをする。5までの足し算・引き算。子どもの絵や模型を数えること。

テーマ：「学校と仕事を知る」：部屋、窓、小窓、ドア、ストーブ、机、黒板を数えること；学校の誇りとすべきものに該当するものを数えること。数を数えること、識別すること、スケッチすること、数で結果を記録すること。10までの足し算と引き算。

テーマ：「子どもたちの健康保護」：身長（ドアの枠に目印をつけて）、体重、胸囲を測定する；握力測定器を用いて握力を測定する。20までの数。数を書き入れること、一定順序に並べること、補数の計算、それらの四則計算。以前出された例題をもとに解答する。

このように、算数に関するスキルの習得について提案を行っているが、シラバスで扱うべきとされている事項や方法を用いて授業を行っても、また行うならば現場の教師たちと教育科学部とのギャップが埋まることは極めて困難と考えられる。

また、シャーツキーは、当該地域でのグース・プログラムを普及することを意図して、この矛盾を踏まえながら、当該地域でのグース・プログラムの実施の際に機械的に適用す

るのではなく、地域の協力が必要であることを述べ、「分別があり実務的な学校がわれわれには必要である。深刻な経済問題や社会問題にあって生活は苦しい。学校はこの作業に参加しなければならないのである。その参加は、その教科課程を実行するという形で行われる。生活に参加する教科課程は、確実な読み書き能力、労働スキル、活動を組織する力、知識を必要とする。それは必然的にコンプレックス的であるにちがいない。われわれの前には労働学校という成果がある。それこそが、教科課程に基づく現代的な活動がわれわれにもたらすところの結論である。」²⁷⁾と地域の協力の下での基礎的スキルの習得を訴えている。

これらの状況を踏まえ、1925年3月31日に国家学術会議は、小学校における言語と算数の教授をコンプレックス・メソッドから独立したものとして、小学校にも言語と算数の教授を許可したのである。²⁸⁾

3. 教科とコンプレックス・システムとの関係をめぐる言説

この関係をめぐる論点は、教育人民委員のルナチャールスキー、国家学術会議・教育科学部のクループスカヤ、ブローンスキー、シャーツキー等の「新しい教育学」の創造を強く志向する指導者たちの側と、国家建設、とりわけ経済・産業に繋がる政府関係者、および都市や地方で教育を担っていた教師たちの側との教育観および状況把握の整合性にあると考える。

(1)第2回全ロシア県社会教育部長大会(1923年3月開催)においてゲース・プログラム概要が報告・審議された。教育人民委員のルナチャールスキーは「これは言葉の完全な意味においてかなり注目すべきことである。これは学校教育事業における革命である。もしわれわれがそれを発展させることができるならば世界的な意義をもつであろうも

のである。」²⁹⁾ゲース・プログラムについて、ルナチャールスキーは「革命」であり、「世界的な意義」をもつものであるとまで賛美したのである。

その後、十月革命10周年の時期に開かれたソ連邦中央執行委員会(1927年10月15日～20日)で「ソ連邦の文化建設の10年の総括」を報告した。そのなかで特にコンプレックス・メソッドの功罪について触れて、「わが国には生きた生活の学習があり、教師の指導の下、生徒たちのグループによる具体的学習がある。生徒たちは、農家を訪れ、見て、聞いて、図表を作って、統計を取り、測定して、農家のことについて読んで、書いて、このことを通して、読むこと、書くこと、数えることを学び、膨大な量の情報を獲得していく。個々の経済現象のコンプレックス的学習を導入して、それらにすべての教育を適用させてきたが、われわれは読み、書き、数えるスキルを十分に速く獲得するようにすることができなかった。」と総括し、「読み書き教育のスピードを魅力的な新教授法のために忘れることは絶対にしてはならない」とも述べた³⁰⁾。ルナチャールスキーは、国家建設に果たす文化・教育の役割を十分に理解していたが故に、当初想定していたような「労働・活動」のなかから基礎的なスキルを獲得するという「魅惑的な」試みも、人材養成というソビエト国家の課題の切実さから停止せざるを得ないと考えたのである。

(2)シャーツキーは、1923年のゲース・プログラム発表段階でも、1925年の第1回全連邦教員大会を経た段階でも、基礎的なスキルの習得の構図を変えていない。特定の教科を設けることにより、それらを習得するのではなく、生活への参加という教科課程は、「しっかりした読み書き能力、労働スキル、活動を組織する能力、知識をもたらす。それは必要に応じてコンプレックス的であらねばならない。」³¹⁾と。

ブローンスキーは、基礎的スキルの習得の意義を認識しており、グース・プログラムに対する批判が激しくなって以降、特別に配慮することを重視した。

クループスカヤも1926年段階において、コンプレックス・メソッドによって、基礎的スキルが形成されるべきであると述べている。³²⁾

グース・プログラムと教科の関係について、カラリョーフらは、「独立した教科目を統合的な人間の知識の個別分野として否定することで、グース・プログラムは学校教育の体系性と系統性を破壊した」³³⁾と結論づけているが、そういう評価は妥当であるのだろうか。本稿筆者は、その後、結局、ソビエト労働学校は「教え込み学校」になり、当時それでも教科教育の独自性とリンクしたコンプレックスの追究が必要であり可能であったと考える。それには、子どもの自主性の尊重、いかなる探究も可能という「真の自由」が保障されていなければならないと考えられるのだが。政治・経済状況と教員たちの力量と対照して吟味していくことが必要であろう。

結びに代えて

ソビエトロシアも新教育の影響を受けながら、学校制度や教育内容を新たに作り上げていかなければならなかった。帝政ロシアの下での①暗記主義、②教科書や本の重用、③授業における教師中心、④子どもの自主性の剥奪、との対抗が教育政策として実現する方向で政府は施策を進めていった。本稿では、1920年代の歴史の中で、教育内容、教育方法について、コンプレックス・システム(メソッド)と教科の関係を軸として検討してきた。

検討の過程で、教育人民委員ルナチャールスキーやグースの中心メンバーであったクループスカヤ、ブローンスキー、シャーツキーたちが掲げるロシアの旧教育に対するアンチテーゼとしての、子どもの自主的・創造的活

動の尊重、労働教育、教授・学習におけるコンプレックス・システムの採用・実施は、十分に近代的な子ども観を踏まえたソビエトロシア流の新教育の展開であったという確信を深めた。

しかしながら、コンプレックス・システムとともに「教科教育」の同時平行的充実を図ることは非常に困難であり、またそれらの独自の発展とバランスを上首尾にとることを実現する前に、「基礎学力の低下」という批判に抗しきれず、それらが頓挫したことも事実である。政治・経済状況の問題と学校教育は緊密に関係しているが故に、学校教育の理想だけを追究することは現実的ではないとも考える。ソビエトロシアの1920年代の壮大な実験は、同時代の他国の実験学校や地域限定であった試みと比較すると、規模としても実践としても新教育運動に大きな影響を及ぼす可能性を秘めていたものであった。

1920年代の実験的試みは、1930年代になると「教科中心主義」に一元化されることになる。子どもの生活や環境を教材の出発点とすることは、「深い学び」に繋がり、豊かさを楽しむことになると考えられる。当時の子どもの学びの状況、労働教育の実態、具体的な授業の状況等を掘り起こす中で、コンプレックス・システムと独立したものとしての「教科教育」の関係性についてより深く検討することを今後の課題とする。

文献・注

- 1) Народное образование в СССР. Общеобразовательная школа. Сборник документов. 1917-1973 гг., М, Педагогика, 1974, с. 135. [アバクーモフ他編. 『ソ連邦の国民教育 普通教育学校 文書資料集』. モスクワ, 1974年]
- 2) Там же, с. 138.
- 3) Там же, с. 139.
- 4) А. П. Орлова, Преемственность

- народной и научной педагогики в трудовом воспитании школьников (1917 – середина 30-х гг. XX века), с. 107. [アルローフ. 「生徒の労働教育における民衆的教育学と科学的教育学の連続性」] <https://lib.vsu.by/jspui/bitstream/123456789/5076/1/v10n3p107.pdf> (2019. 7. 5).
- 5) Ксения Соловьева, Программы ГУСа: уроки прошлого и современное осмысление. [サラヴィヨーフ. 「ゲームのプログラム：過去の教訓と現代の解釈」] <https://pedsovet.org/publikatsii/professiya-i-pedagogicheskie-soobschestva/programmy-gusa--uroki-proshlogo-i-sovremennoe-osmyslenie>. (2019. 7. 7).
- 6) В. Б. Помелов, Программно-методическая работа Наркомпроа РСФСР в первые годы советской власти, «Вестник Вятского государственного университета», 2018, № 4, с.102. [パメローフ. 「ソビエト権力初期年間のロシア共和国教育人民委員部の教科課程編纂・教授法研究活動」. 『ヴァートカ国立大学紀要』. 2018年第4号] <https://cyberleninka.ru/article/n/programmno-metodicheskaya-rabota-narkomprosa-rsfsr-v-pervye-gody-sovetskoj-vlasti/viewer> (2020. 10. 16).
- 7) Н. А. Константинов, Е. Н. Медынский, М. Ф. Шабаева, История педагогики, М., 1974, с. 357. [コンスタンチノフ, メディンスキー, シャバーエフ. 『教育史』. モスクワ, 1974年]
- 8) Королев Ф. Ф., Корнейчик Т. Д., Равкин З. И.: Очерки по истории советской школы и педагогики (1921 - 1931). Изд-во АПН РСФСР, 1961, с. 63. [カラリョーフ, コルネーイチク, ラーフキン. 『ソビエト学校と教育学の歴史概説(1921-1931年)』. モスクワ. 1961年]
- 9) Там же, с. 64.
- 10) Там же.
- 11) Отв. Ред. Н. П. Кузин, М. Н. Колмакова, З. И. Равкин, Очерки истории школы и педагогической мысли народов СССР (1917-1941 г. г.), Москва, 1980, с.92. [エヌ・ペ・クージン, エム・エヌ・カルマコーフ, ゼ・イ・ラーフキン責任編集. 『ソ連邦民衆の学校・教育思想史概説』. モスクワ, 1980年]
- 12) Г. Гордон, Новая школа: Принципы, структура, методы, «На путях к новой школе», Москва, 1922, № 1, с.5. [ゲ・ガルドーン. 「新しい学校：原理、構造、方法」]
- 13) Там же, с. 13.
- 14) Там же.
- 15) С. Т. Шацкий, Школа для детей или дети для школы, «На путях к новой школе», 1922, № 1, с.26. [エス・テ・シャーツキー. 「子どものための学校あるいは学校のための子ども」]
- 16) Н. К. Крупская, Задачи школы 1-ой ступени (Четырехлетка для детей 8—12 лет), «На путях к новой школе», 1922, № 1, с. 33.
- 17) П. П. Блонский, Педагогические задачи начальной школы, «На путях к новой школе», 1922, № 1, с.42. [ペ・ペ・ブローンスキー. 「小学校の教育学的課題」]
- 18) П. П. Блонский, Схема занятий в трудовой школе 1-й ступени, «На путях к новой школе», 1922, № 3, с.4. [ペ・ペ・ブローンスキー. 「初等科労働学校の授業スキーム」]
- 19) Там же.

- 20) Королев Ф. Ф., Корнейчик Т. Д., Равкин З. И.: Очерки по истории советской школы и педагогики (1921 - 1931) , с. 447.
- 21) П. П. Блонский, Наркомпрос. ГУС, "Педагогика", 1995, №2, с. 85. [ブローンスキー未発表原稿. 「ナルコムプロス。グース」. 『教育学』. モスクワ, 1995年]
- 22) Королев Ф. Ф., Корнейчик Т. Д., Равкин З. И.: Очерки по истории советской школы и педагогики (1921 - 1931) , с. 121. 彼らはこの箇所とは違ってグース・プログラムに対してかなり厳しい批判をしているが、コンプレックス・システム、教科教育に対する批判と整合性がとれていない。
- 23) Там же.
- 24) И. Д. Мартыненко, Методические вопросы делегатов учителей на всесоюзном учительском съезде в связи с применением программ ГУС'а, «На путях к новой школе», 1925, № 2, с. 49-50. [マルティネンコ. 「グース・プログラムの適用と関連した全連邦教員大会教員代議員の方法論上の諸問題」. 『新しい学校への途上にて』]
- 25) И. Г. Автухов и И. Д. Мартыненко, Программы Гус'а и массовая школа, Москва, Изд. 2-е, 1925, с. 81. [イ・ゲ・アフトゥーホフ, イ・デ・マルティネンコ. 『グース・プログラムと民衆学校』. 第2版, 1925年]
http://www.intellect-invest.org.ua/rus/library_library_2-rus-ukr/(2020. 12. 09).
- 26) Там же, с.100.
- 27) Под редакцией С. Т. Шацкого, Программы ГУС'а и местная работа над ними, 2-е изд., М., 1925, с. 8. [シャーツキー編. 『グース・プログラムとそれへの地方での活動』. 1925年]
- 28) Larry E. Holmes, The Kremlin and the schoolhouse, Indiana University Press. 1991, p. 80. [レリー・イー・ホームズ. 『クレムリンと校舎』, 1991年]
- 29) А. В. Луначарский, Значение новых программ, «Народное просвещение», Москва, 1923, № 4, с. 74. [ルナチャールスキー. 「新しい教科課程の意義」. モスクワ, 1923年]
- 30) А. В. Луначарский, Об итогах культурного строительства Союза Советских Социалистических Республик за 10 лет, «О народном образовании». М., 1958, с. 381. [ルナチャールスキー. 「ソビエト連邦社会主義共和国の10年間の文化建設の総括」. 『民衆教育論』. モスクワ, 1958年]
- 31) Под редакцией С. Т. Шацкого, Программы ГУС'а и местная работа над ними, с. 8.
- 32) Н. К. Крупская, Программы ГУС'а для школ I ступени, «Педагогические сочинения», Т.3, М., 1959, с. 221. [エヌ・カ・クループスカヤ. 「国家学術会議初等科学学校教科課程」. 著作集第3巻, モスクワ, 1959年]. なお明治図書出版の『クループスカヤ選集』第9巻『教育内容と教科書』のなかに論文の訳が収録されている。
- 33) Королев Ф. Ф., Корнейчик Т. Д., Равкин З. И.: Очерки по истории советской школы и педагогики (1921 - 1931), с. 72.

*所伸一氏にはとりわけブローンスキー関係資料に関わるとご支援、全体に関するご助言等、大変お世話になりました。厚く感謝を申し上げます。しかし、ご支援・ご助言を本稿において十分には生かせなかったことを含め文責はひとえに本稿筆者にあります。

